
タリスマン

パニラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タリスマン

【Nコード】

N1189Z

【作者名】

パニラー

【あらすじ】

「本当に、何でも願いが叶うのか？」

大切な人を失った。

いつまでも続くと思っていた日常が、音をたてて崩れ去る。

もし叶うなら、何をしてでも叶えたい願い。

「ようこそパラシアへ！」

その願いを叶えるためにやってきたのは異世界、パラシア。

「お前は、タリスマンを探しているのか？」

そこでの学園生活。

新しい仲間たちと過ごす、新たな日常。

そのなかで探す願いを叶える存在。

「これは……アイツの形見だ！お前なんかに渡してたまるか！」

それに近づくにつれ変化していく日常。

そして明らかになる謎の組織。

立ち塞がる困難。

「願いを叶えるために、俺はここに来たんだ」

異世界学園ファンタジー

タリスマン

パニラーが贈るファンタジー。

この小説は外部サイト『E エブリスタ』にて重複投稿となっています

「プロローグ」 悲劇と始まり（前書き）

当サイト『小説家になろう!』では初投稿となります。まだまだ未熟な点は多々ありますがよろしく願います。

「プロローグ」 悲劇と始まり

キキイイイ!!

タイヤの摩擦する音が響き渡る。

『春っ!』

『新斗君!』

やがて訪れる、衝撃音。

二つの人影が宙を舞った。

『どうにかならないんですか!?!』

そこは病院の一角。

一人のがたいのいい男が叫ぶ。

その前にいる白衣を着た医者 of 男性は首を横に振る。

『そ、そんな……』

医師はそのまま踵を返し、扉の向こうに戻っていった。

“手術中”と書かれた赤いランプが点灯し、再び長い戦いが始まる。

少年は暗闇にいた。

どこまでも続いていそうな深い闇。

『ここは……どこだ?』

……春? 春!?!』

少年の声は闇の中では響いているのかさえわからない。『新斗君

……』

ふと後ろから聞こえた声に少年は勢いよく振り返る。

するとそこには探し求めていた少女の姿があった。

『春！』

少女の元へと走り出そうと足を動かす。

しかし、足は動いているのにいつこうに距離は縮まらない。

『新斗君……。あなたは生きて？』

『は？な、何言ってるんだよ？一緒に帰ろう！？』

少年は必死に懇願するが少女は首を横に振り、きっぱりと否定する。

そして、二人の距離が少しずつ離れていく。

『春っ！春うっ！』

少年は走るが、距離はどんどん離れていくだけ。

その闇の中で少年が見たのは

『ばいばい、新斗君……。』

目尻に涙を溜めながら、輝くような笑顔を見せる彼女の姿だった。

『春！』

勢いよく体を起こす。

するとそこは見慣れない部屋。

体にはいくつものケーブルが刺さっていて、それが繋がっている機械からはピッピッピッと電子的な音が鳴っていた。

周りを見渡してみても彼女の姿はない。

『新斗君……。！』

『おじさん……。』

彼女の代わりに立っていたのは男性。

『おじさん……。春風は……。？』

声が震える。嫌な予感しかしない。

彼の表情を見たらそんなことは一目瞭然だった。

『春は……』

死んでしまった……』

それは、もう一つの始まり。

『おい』

『………』

『おい、起きろ。』

こんなところで寝てると風邪ひいちまうぞ』

『………』

『………』 ったく。しょうがねえなあ………』

彼女は眠っていた。

ある学園の屋上で。

男は見つけた。

その少女を。

『こんなとこ誰かに見られたら大変なことになるな………』

『………』

『………』 うおっ!?!』

『………』

『よ、よう。調子はどうだ?』

『………』 誘拐犯?』

『………』 !』

『………』 あ、逃げた』

その少女は見ていた。不思議な格好をした女の子を。

そして感じた。不思議な力を。

願い。

それは未来を望むこと。

全ての世界にはあらゆる願いが溢れている。

願いは力。 糧として宿主に希望を与える。

その世界には一つの石があった。

青く透き通る水晶のように綺麗な石。

それは、強い願いを叶える。

良い方にも悪い方にも。未来をねじ曲げる力を持つ。

その石を巡る物語がここに始まる。

タリスマン

願いを叶えるために人は強くなる。

「第一話」 Re・Set

朝。とある町の中心に位置する大きな病院。

朝日を浴びるその佇まいは他の町のそれとはあまり変わらないだろう。そのうちの一案。

個室であるその病室のベッドの上には一人の少年の姿があった。

彼の名前は藤堂アラト。

少し茶気を含む黒髪で病人である証の服に身を包んでいる。

両足はぐるぐる巻きのギプスで固められていた。

「……はあ」

もはや本日何度目かわからないため息を吐き出す。

外を眺めればとても綺麗な青空が広がっており、その下を鳥たちが飛び回る。

いつもと変わらない。変化があるとすれば天気や気温の違いだけ。やることは毎日同じこと。

つまらない。

足が動かず、一人ではとても外を歩くことさえもできない。

それ以前にそんな気分にはさえならない。

外の陽気とはまるで正反対、彼の心は曇り空だった。

何も……何も変わらない。

「……いや、変わってしまった、か」

彼は自重気味に呟いた。

その表情には笑みが浮かんでいるが、それは貼り付けられたただの仮面のようだった。

夕方。

日が傾き、部屋には西日が差し込み病室は夕焼け色に染まってい

た。

「……………」

アラトはただ黙々と本を読んでいる。

一言も話さずに、しかし、その本を心から楽しんではいないようだった。

するとその時、コンコンツと乾いた音が部屋に響いた。あの人だな……………」

「……………」

何となく予想はついている。

そういう風な感じを思わせる素振りでアラトはノックに答えた。

スライド式の白い扉が開かれ、現れたのはやはり考え通りの人物だった。

「やあ、アラト君。お加減はどうだい？」

「特に異状はありません。いつも通りですよ、おじさん」

おじさん 紅坂恭平はよくアラトのお見舞いに来ている。

おじさんと呼ばれているため中年を連想しがちだが、彼はそこまで年をとっているわけではない。

年は三十後半で、過去に鍛えていたのか引き締まった体つきをしている。

それでいて身長も高く、まさに“格好いい大人の男性”に見える。お婆ちゃん格の女性からは絶賛されているとのこと。

仕事帰りなのかスーツ姿で今日は来ていた。

いつもなら私服でラフな格好をしているイメージが強いために新鮮に感じるができる。

しかし、これは“いつもとは違う”ということの意味し、“何か違うこと”が起こるかもしれない。

そういう風にも考えられないだろうか。

「実は……………」今日は君に渡したいものが見つかったね」

いつも通りなら他愛もない会話をして、花瓶の花を取り替えると帰ってしまう恭平だったが、今日はやはりいつもとは違ってそんな

ことを口にした。

渡したいもの？とアラトは首を傾げつつ尋ねる。

彼はズボンのポケットから小さな紙包みを取り出す。

それをアラトに手渡すと、開けるように促した。

アラトがそれを丁寧に開けると、中から青い石のペンダントが顔を出した。

「おじさん、これは……！」

アラトの表情が驚きに染まる。

それと共に昔の記憶の中の一人の少女の姿が鮮明に頭に思い浮かぶ。

その反応に恭平は懐かしむように目を細めて頷いた。

「そう。……それはあの子　春のペンダントだ」

春。アラトの幼馴染みの少女の名前。

その名は……なるべく思い出さないようにしていた。

思い出したくなかった。

考えたくなかった。

彼女はもう、この世にはいないから。

三ヶ月前。

とある事故が起きた。

夜、雨の中道端で猫を避けようとしたトラックがスリップを起こし、その場にいた二人の男女を撥ね飛ばすという事故。

その二人こそアラトと春だった。

アラトはなんとか一命を取り止めたが、下半身を骨折。対する春は、即死だった。

それから月日は流れ、現在に至る。

「……これを俺に？」

「ああ。君に持っていてほしい」

紅坂恭平。彼は彼女の父親だ。

だからこそアラトにはわからなかった。

手渡されたペンダントは春風の形見。普通なら誰かに渡すことなどないだろう。

「……本当に、いいんですか？俺なんかがもらって」

アラトはまだ腑に落ちないらしい。

それだけ重大なことだと理解してるが故にだ。しかし、恭平は何も言わない。

ただ優しい笑顔を浮かべて首を縦に振るだけ。

「……どうして……どうして俺なんですか？」

春風の形見。それを持っていられるのは嬉しい。

しかし、それ以前に自分が持っていたらいけないものだとはアラトは思っていた。

あの日、春が死んだのは

「俺の、せいなのに……」

涙が溢れ出す。

思い出してはいけない記憶。たくさんの思い出と共に。

「あれは君のせいじゃない。ただの事故なんだよ」

「……違っんです。あの日の前、俺たち喧嘩してて、それで！」

自己嫌悪、過去への後悔が心を捕らえる。

だが、体を包む暖かさにそれは止められた。

「……いいんだ。……もう、いいんだよアラト君」

「うっ……！うああ……！」

心に残された傷は深く、今だ癒えることはない。

自然と涙が溢れ、そして落ちていく。

いくら謝ったところでもう彼女は戻ることはない。

もう、何もかも遅いのだ。

「……………」

夜。

窓越しに外を見上げてみれば満天の星空。

月明かりに照らされて電気をつけなくとも部屋は優しい光で満たされていた。

アラトは受け取ったペンダントを眺める。

月の光を受けてキラキラと光るそれはとても綺麗だった。

「……春。俺ってホントにダメだよな」

目を閉じ、瞼の裏の闇の中に佇む一人の少女。彼女に向かってアラトは声をかける。

返事はない。ただ悲しそうな顔をしているだけ。

「そんな顔するなよ。……こっちまで悲しくなるじゃんか」

目尻から再び涙がこぼれる。

渴れることは、もうないかもしれない。

電気についていない病室には涙を拭う音だけが響き渡る。

それを見る者も、いないはずだった。

ズバンッ！

突如、部屋の窓が独りでに開いた。

当然アラトは驚き、飛び上がる。

「君が、藤堂アラト君ですか？」

何が起こっているのか理解が追い付かない。

部屋にはアラト以外誰もいないはずなのに少女の声が聞こえた。

「……だ、誰だ」

声の主に尋ねる。

彼の声は恐怖に震えていた。

すると、窓から 四階の窓あるはずの外から人が入り込んでき

た。

「……………」

「こんにちはー。あ、もう“こんばんは”か」

「……………」

絶句。

目の前に現れたのは一人の少女。

月明かりに輝く金色の長い髪の毛。

白の生地には紫のラインが走る衣装。

その服と同じデザインの帽子を頭に寄せ、アラトに向かって笑いかけている。

何者かわからない。

しかし、美少女だ。

無性にも胸が高なってしまった。

「藤堂、アラト君ですよね？」

重ね重ね、むしろ確認に近い少女の問い。

アラトはそれに頷くだけで答える。

全てが謎の目の少女。

全く得体の知れない、と表すこともできるかもしれない。

アラトの頷きに満足そうに微笑み、再び口を開いた。

「私はミステイール・コン・グラチェリア。ミステイと呼んでください」

金髪の美少女　ミステイはそのまま続ける。

「実は今日、君に折り入って頼みがあつて来ました」

「ちょっと待ってくれ。お前どうやって来たんだ？ここ四階だぞ？」

本題にはいる前にまず解決しておきたいことがある。

彼女の正体だ。

「流石に幽霊や妖怪とかじゃない、よな……？」

ちなみにアラトは幽霊の類いの存在を認めてはいない。

だからこそこんな状況に置かれて焦っているのだ。

人は未知なるものが現れるとまず恐怖するのだが、それは無知だからである。

今のアラトの状況も同じで、得体の知れない存在をそのままにしておくわけにはいけないのだった。

「大丈夫ですよ。私は歴とした人間です」

苦笑してそう答えるミスティの言葉にとりあえず安堵した表情を見せるアラト。

「まあ、この世界の人間じゃないですけど」

「聞き捨てならないなオイ」

「えっ？何がですか？」

「確かに俺は幽霊の類いの存在は信じてないが異世界人とかも同じなんだよ！」

「でも私、本当に違う世界の人間なので……」

そう言つてミスティはごめんなさい、と頭を下げる。

「いや、謝られても困るんだが……」

「ありがとうございます？」

「お礼も違うだろ」

そこでアラトは呆れて一つため息をつく。

「まあ、それはもういいよ。で、その異世界人が俺に何の用だよ？頼みがあるって言つてたよな？」

自分は頼み事をされるほどの人間ではない。とアラトは思う。

足が動かせない彼には人間が行う行動のほとんどが制限されているからだ。

たえ怪我をしていなくてもそう思っている。

「まあ、見ての通り俺は足が動かないんだ。だからできることも限られてると思うけど」

しかしミスティは笑顔を見せ、

「そんなこと、少しも問題になりませんよ」と言う。

そんな呆気ない返答にアラトは首を傾げる。

（そんな簡単な頼みならどうして俺なんか……？）

それは当然の疑問だった。

足を動かせない自分にでもできることなら他の人の方ができるだろう。 それなのになぜ

「何で俺なんだ？」

一瞬キョトンとするミスティ。

どうやら突然のアラトの問いに理解が追いつかなかったらしい。

「何でって……君しかできないから、ですよ」

「足が動かない俺なんかに出来ることならもつとできる人が他にもいるんじゃないのか？」

もつと他に代わりがいるじゃないか、とアラトは続けた。

しかし、ミスティはそれに首を振って否定する。

「いいえ。これはアラト君だけにしか頼めません」

「……どういうことだ？」

わけがわからないといった風にアラトが漏らす。

そして、ミスティが意を決して口を開いた

「それは……君には強い“願い”があるからです」

“願い”……？……ますます訳がわからなくなったぞ

願い、といったら願い事の“願い”なのだろうがそれが自分にある、とはアラトは断言できない。

なぜなら、それはいくら願ったところで叶うものではないからだ。

「君には一緒に来てもらいたいです」　今まで考え込んでいたアラトだったが、その台詞に顔を上げた。

「一緒に、って……」

一瞬、ある考えが脳裏に浮かぶ。

いやいや、そんなことあるはずない。アラトは頭を振ってすぐさまその考えを消した。

（一緒に異世界に行くなんてありえないだろ。ただ別の場所に連れていきたいだけだ）

アラトは自分に言い聞かせ、一人納得する。

しかし、その予想は的中となってしまうのだった。

「私たちの世界 “パラシア” に！」

「……………え？」

長い間をおいてようやく出てきた「え？」

「パラシアに、ですよ。異世界に来てもらいたいです」

そんな馬鹿な……。アラトはガツクリと項垂れる。

「……………本当に行くのか？」

念のため尋ねてみる。

それにミスティは満面の笑みで頷くだけであつた。

「でもどうやって？」

「それは私に任せてください」

そう言つとミスティは懷から銀色の細長い棒状の物を取り出した。装飾の施されているそれはまるでオーケストラの指揮者が使う指揮棒のようで、ミスティはそれを空中に円を書くように振る。

それを見てなにかをしでかすつもりだとアラトは考え、慌てて口を開いた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！何なんだよお前！いきなり現れて一緒に来てくださいなんて……。パラシアって何だよ！？何で俺が行かなくちゃいけないんだ！？」

その様子を見、ミスティは指揮棒 タクトを振るのを止めた。

そして、アラトのことをまっすぐ見つめると口を開く。

「アラト君。君には強く大きな、そして決して叶えることのできない願いがあります」

「……………なっ！？」

アラトは思わず口をつぐむ。

自分の願い……。それをミスティが知っているようだから。

「その願いを叶えてみたい……。できるなら叶えたい、と思つていますよね？」

「……………」

言葉がでない。ただ俯いて黙り込むだけ。

彼女、ミスティに心の内側をすべて見破られているような。

そんな口ぶりにどうにも受け入れがたい気分になってくる。

「私と一緒に……。パラシアと一緒に来てくれれば、叶えることができますよ」

「……………えっ!？」

アラトが驚くのを見てミスティはそのまま言葉を紡いでいく。

「アラト君。君にはパラシアに来れる資格があるんです。その胸の願いを叶えませんか？」

「……………」

すぐには頷けない。

訳もわからない謎の少女の言葉が嘘のようには思えない。

確かに、アラトの心にはある願いが常に、深く刻み込まれていた。

幼馴染み、春の蘇生。

それがアラトの願い。

決して叶うことのない夢。

それが今、叶うと言われているのだ。

しばらく沈黙が続き、やがてアラトがそれを破った。

「俺は何をすればいい?ただ俺がそこに行くだけで願いが叶うのか?」

「……………ごめんなさい。それについてはここでは説明できないの」

「……………なんでだよ?」

「もし方法を知って、もしそれが危険なことだったらついてきてくれないでしょう?そうなったら困るから言えないんです」

「……………つまり、その方法って危険なことって訳だな?」

「はわ!どっとうしてわかったんですか!？」

こいつバカだ……。と、心のなかで呟きながらアラトは小さく笑った。

「本当にその方法で願いが叶うんだな?」

慌てふためいているミスティに向かってアラトは問う。

最後の確認として。

「えっ？あ、はい。きつとどんな願いでも」

そのミステイの答えを聞いてアラトは目を瞑る。

（……春）

心の中だけにいる幼馴染み。

彼女が生きている世界。それをどれ程望んだのかわからない。

（ごめん。俺にはやっぱりお前が必要みたいだ）

「……行くよ」

「え？」

「お前に、ついて行く」

「ほっ、本当ですか！？」

ただ、今だけは……。

この願いを叶えてみたい。

そう思うの、許してくれよ？春。

「第二話」異世界『パラシア』

それから。

喜び続けるミステイを落ち着かせることに成功し、今は日付が変わろうとしていた。

「それで、俺はどうすればいいんだ？」

吹っ切れた表情を見せるアラトは先程とはもはや正反対。早く行きたくてうずうずしているようだ。

「これから私がこのタクトでアラト君を精神体にします」

「精神体？」

と、アラトはおうむ返しで尋ねた。

「はい。今アラト君は怪我によって足が動かせないんですよ？」

その問いにアラトは頷く。

「ですから精神は自由に動けるんです」

「ちょっと待て。意味がわからないぞ」

「これからアラト君の魂だけを取り出して連れていくんですよ」

「た、魂！？」

「それじゃ始めますよー！」

ミステイが銀色のタクトを一振り。
すると、白い円陣がアラトの周りに浮かび上がった。

「人の……はな、し、を……」

そして、彼に襲いかかるのは急激な睡魔。
それに太刀打ちする間もなく、アラトの意識は闇に落ちていった。

「……………！……………ト君！」

やがて暗闇の中でアラトは声を聞いた。

「……ラト君！起きてください！」

「……………う」

耳元でやかましく騒ぐ声にすぐに意識は呼び戻されていく。
そして、アラトはゆっくりと目を開けた。

「アラト君、やっと起きてくれましたね！」

「……………ミステイ？」

起きて、まず最初に目には入ったのはミステイの顔だった。

そして、後頭部には柔らかい感触。

自分が今どのような状況になっているのか理解するのにそこまで時間はかからなかった。

「どっせええい!!」

意味不明な言葉と共にアラトは飛び起きた。
というより、逃げた。ミステイの膝枕から。
「なっ、何してんだミステイ!!」

顔を赤くしてアラトは叫ぶ。

膝枕など今までに数えられるほどしかしてもらっていないため耐性がついてないのだ。

「あ、それよりパラシアにつきましたよ」

「え?」

アラトは我に帰ると周りを見回してみた。

「……………」

言葉を失った。

辺り一面に草原が広がっており、遠くには川、山、海、街などが見える。

アラトとミステイのいる場所は丘になっているようで遠くまで見渡すことができた。

「……………あ!た、立ってる……………。俺立ってるぞ!」

それに加え、今まで両足の骨が折れていたために立つことさえできなかったアラトが今は何の違和感もなく普通に立っていた。そのためアラトは興奮を抑えきれなかった。

「それにしても、すごいなここ……」

テレビや映画の中でしか見たことがないような大自然。素直に、いくらでも感動の声は上がる。

「ここが、異世界……」

「はい！パラシアです！」

頭上には太陽が輝き、空には鳥たちが飛び交う。

風が辺りの草花をなびき、自然の香りが胸一杯に広がった。地球にもこんな場所はあったのだろうか、とアラトは考える。少なくとも彼の身近には存在していなかった。

だからこそこの広大な景色は本当に異世界のように思える。

「……本当に来ちまつたんだな」

ふと、アラトが呟いた。

この世界で、願いが叶う。その事を信じ、やって来た世界。

（ここで俺は……必ず……！）

すると目の前を白い蝶が通りすぎた。

「あっ！可愛い蝶です！」

と、ミスティが真っ先に反応した。

蝶を可愛いものと判断するということは結構可愛いもの好きだと思える。

と、どうでも良いことをアラトは考えていた。

「へえ。この世界には蝶がいるんだな」

「はい！基本的にはさっきまでいた世界に生きている動物はたくさんいますよ！」

ふーん、と返しながらゆっくりと飛ぶ蝶の姿を目で追う。

その次の瞬間蝶の姿が消え去った。

その事を頭で認識するよりも早く、ミスティが叫ぶ。

「あつ！危ない！」

それと同時に彼女はアラトを突き飛ばした。

そして、今アラトの姿があった地面に穴が開き、そこから大きな獣が現れた。

まるでモグラのような手を持つ狼の姿をしている。

明らかに普通の動物とは違う。怪物だ。

「なつ、なんだよコイツ！？」

「魔物です！」

ミスティに魔物と呼ばれたそれは尻餅をつくアラトに襲いかかる。ミスティはすぐさまタクトを取り出してそれを一閃した。

すると、アラトの周囲にどこからか出てきた花びらが飛び交い完全にアラトの姿を隠してしまう。

魔物は足を止め、様子を伺い始めた。

「願うは“花”！敵を切り裂く刃となりて、突き進め！《スラッシュ》」

タクトで宙に円を描きながらミスティは言葉を叫ぶ。

そして、言い終えた後タクトを魔物に向かって突き出した。

すると、アラトを包み込んでいた花びらはざわめき、その全てが魔物に突進していった。

魔物は逃げようとしたが、あつという間に体を包み込まれてしまふ。

そして、花吹雪はやがて散っていくと、そこにいたはずの魔物の姿はなくなっていた。

「大丈夫ですかアラト君？」

「え？あ、ああ」

あまりに現実離れた出来事にアラトは呆気にとられていた。

「そ、それより今の何だ？猛獣か？」

アラトの問いにミスティは首を横に振る。

「今の生き物は魔物です」

「魔物って悪の手先とかそういう……？」

「いえ。このパラシアに生息する種族の一つです。動物と同じように草食や肉食、雑食に分かれています。今のよう凶暴な性格のものだと人を襲うんです」

「じゃあお前が使ったあの花びらは？」

「あれは魔法です。あ、これについては私が説明するより後でよくわかるから待っててください」

「……………」

本当に、別世界に来てしまったのか、とアラトは心のなかで呟いた。

「さ、他の魔物が来ないうちにいきましょう？」

「行くってどこに？」

「私たちの街ですよ！」

ミスティはそれだけ言うと駆け出した。

「あつ、おい待てよ！」

アラトも遅れて走り出した。

目指すは、目前にある街。

魔法都市 シェリグ

中世の外国の街を連想させるような作りの街で、辺りは人で賑わい全体的に活気のある雰囲気だ。

街を囲む外壁の門を潜り抜け、ミスティとアラトは街へと足を踏み入れた。

「……でかい街だなー」

見たこともない光景ばかりで新鮮なのかアラトはあちこち見回しながら呟いた。

その隣では時計らしきものを見てミスティが安堵を漏らしている。

「よかったあ。予定時刻よりも早いですよ。アラト君。何かやってみたいことがありますか？」

「やりたいこと？うーん、じゃああちこち見て回りたいかな。もとの世界との違いも知りたいし」

「わかりました！」

ついてきてくださいとミスティが言うと、先導を始める。

「はー……おいしいですう……」

「確かに美味いけどさ、流石に食べ過ぎじゃないか？」

現在、アラトとミスティはシェリグの街を回り、色々な店を巡っ

ていた。

そして、ミステイの両手にはアイスが握られていて、本当に幸せそうな表情で食べている。

ここまででアラトがわかったことは買い物の仕方が元の世界と変わらないことや、食べ物も違いはあるが似ているということだ。

中世の街といっても見

魔法都市 シエリグ

中世の外国の街を連想させるような作りの街で、辺りは人で賑わい全体的に活気のある雰囲気だ。

街を囲む外壁の門を潜り抜け、ミステイとアラトは街へと足を踏み入れた。

「……でかい街だなー」

見たこともない光景ばかりで新鮮なのかアラトはあちこち見回しながら呟いた。

その隣では時計らしきものを見てミステイが安堵を漏らしている。

「よかったあ。予定時刻よりも早いですよ。アラト君。何かやってみたいことはありませんか？」

「やりたいこと？うーん、じゃああちこち見て回りたいかな。もとの世界との違いも知りたいし」

「わっかりました！」

ついてきてくださいとミスティが言うと、先導を始める。

「はー……おいしいですう……」

「確かに美味いけどさ、流石に食べ過ぎじゃないか？」

現在、アラトとミスティはシェリグの街を回り、色々な店を巡っていた。

そして、ミスティの両手にはアイスが握られていて、本当に幸せそうな表情で食べている。

ここまででアラトがわかったことは買い物の仕方が元の世界と変わらないことや、食べ物も違いはあるが似ているということだ。

中世の街といっても見た目が見慣れていないということだけでさほど違和感を感じられなかった。

「なあ、普段の生活でさっきみたいな魔法を使ったりしないのか？」

周りの人々をもう一度見回してアラトが尋ねる。

「はい。あれは結構疲れるもので、日常生活ではあまり使われないんですよ」

「そうなのか……」

遠目で見える街を見ても、元の世界とあまり変わらない。

アラトはここに来た目的が果たせるのかどうか。ただその“確信”が欲しかった。

だからこの世界の生活の一部に元の世界と違う部分を見つけないのだ。

「まあ……、それは後になってもわかるか……」

アラトは小さく、自分に言い聞かせるように呟いた。

「そろそろ行きませんか？」

「俺、お前のこと待ってただけど……」

焦ったところで何にもならない。

つまりはそういうことだ。

「す、凄いところだな……」

ミステイに連れられやって来たのは中世の王城みたいな大きな建物。

城壁に囲まれていて、門を潜るととてもきれいな中庭が広がっている。

「ささづ。こちらへどうぞ」

ミステイが指し示す場所、その足下にはなにやら見たことがあり

そんな円陣が描かれていた。

「あれ？あそこから入るんじゃないのか？」

城には巨大な扉がある。普通はそこから入るはず。

「まあまあ。今はこれに立ってみてください」

そうしてアラトは渋々円陣に足を踏み入れた。

「で？何をするんだ？」

「こうするんです」

再びどこからともなく取り出したタクトを振るうミスティ。
すると、円陣の白い線が発光し始める。

「我願うは“空間”。彼の者を壁を越えて、送り届けよ。【テレポ
ート】」

ミスティが先程のように言葉を紡ぐと、アラトは円陣の光に包ま
れる。

そして、その光が消えたときそこにアラトの姿はなくなっていた。

視界が暗転し、浮遊感が身体中を包み込む。
すると、気づけば足が地に着いて気持ち悪さもなくなった。

アラトは思わず瞑っていた目を開ける。

一番始めに目に写ったのは扉。

そこは壁に本棚があるだけの何の変鉄もないただの小部屋だった。近くにミステイの姿はない。

とりあえず、扉を開けることにした。

「おや？もう来てしまったのか」

扉の先は本の山。見渡す限り本、本、本。

その中から男性の声が聞こえたが、どこにいるのかさっぱりわかりはしない。

「あ、あの……」

「ん、少しだけ待ってくれ。今片付けるから」

男性がそう言うと、次の瞬間驚くべきことが起こった。

部屋にびつちりと積まれていた本が一瞬にして消えてしまったのだ。

「嘘だろ……」

「虚空などではない。これも現実だ」

ハッとして目を向けると、そこには豪華な机にそれに向かって座って頬杖をついている一人の男性の姿があった。

髪は銀髪で前髪が右目が隠れるほど長く、左目からはアラトをまっすぐ見つめる光が見える。

年は三十前後だろうか。若くもなく、それでいて老けて見えるわけでもない。

身に纏っているオーラだろうか。そんな感じの気が感じるのだった。

「えっと……あなたは……？」

「紹介が遅れたな。私の名はノア。ノアⅡリザヌトウスⅡペイン。この学園の長を勤めている」

「が、学園の長ってことはここで一番偉い人ですか？」

「そういうことだ。」

藤堂アラト君。ようこそ……ディアストロシムへ」

銀髪の男性　ノアは立ち上がるとアラトの前まで移動する。

「この学園に来ることを決断してくれたことに感謝したい。どうしても君の力が必要だったのだ」

「俺の、力？」

「そう。君の。君だけの力」

そして、彼はアラトに手を差し出した。

「どうかその力を私たちに貸してほしい」

「俺なんかで、いいんですか？」

アラトにはわからなかった。なぜ彼らが自分を求める理由、自分の力を。

今まで普通に生きてきて普通に学校生活を送ってきただけ。

そんな自分にいたい何の力があるのか。想像も出来ない。
しかしノアは、

「何度も言わせないでくれ。私は君自信の力と言っているのだ。躊躇うな。自信を持て」

「……………」

自信。

今のアラトにとって確かに欠けてるもの。
幼馴染みを目の前で失ったことに対して、自分は無力なのだと思う
ってしまっているのだ。

しかし、ずっと胸に抱えてきた願いを叶えるには、この手を握る
しかない。

自分だけができること。

アラトは意を決してその手を握った。

「わかりました。よろしく願います」

「ありがとう。こちらこそこれからよろしく頼むよ」

この場で合意したこと。つまりそれは学園への入学も意味する。

「まずは部屋の手配を済ませよう。いるかな？ミスティール」

「はい」

ノアの言葉にアラトの背後から返事をする声が聞こえた。

振り返ってみるとそこにはミステイの姿があった。

「あれ？ミステイ？お前いつからここに……」

「アラト君の世話は任せる。いいかな？」

新斗の言葉はノアによって遮られ、そのまま話は進んでいく。

「はい！もちろんです！さ、アラト君行きますよ？」

「えっ？あ、ああ」

ミステイはアラトを急かすと、扉の外へ出て行ってしまった。
そこでアラトは一度ノアの方を振り返る。

ノアは変わらない微笑を浮かべながら口を開く。

「困ったことができたら何でもミステイに尋ねるといい。彼女は君のことを思ったよりも気に入っているようだからな」

「は、はあ……」

「ふっ。……まずはここでの生活を楽しんでほしい。そして、後日やつてもらいたいことを伝えることにしよう」

「わかりました」

「それではまた、な？」

「は、はい。失礼します」

部屋を出るとミステイが待っていた。

「なにか話してたんですか？」

「いや、何でもないよ」

目の前の相手に気に入られているなんて言えるわけがない。それを漏らさないようにアラトは口をしっかりとつぐんだ。

「そうですか。それじゃ今からもう一度転送するので目を瞑ってください」

「え？またさっきのをやるのか？」

「仕方ないですよ。この部屋に出口なんて無いんですから」

「なんて不便な……」

「はい、始めちゃいますよー？」

「ちょっと待っ……！」

心の準備なんてする間もなく、アラトは再び転送させられていった。

「……どこだここ？」

目を開けると、今までいた部屋でも最初にいた庭園でもない場所。目の前には大きな建物が立ちふさがっていて、入り口と思える所にはミスティと同じような格好をした人たちが闊歩している。

「この建物が宿舎ですよ」

再び後ろからミスティが遅れてやってきて説明する。

「この学園のほとんどの生徒がここに寝泊まりして、大きい食堂もあつたりしてすごいところなんですよー」

「食堂を真つ先に言うなんてお前結構食いしん坊なのな」

アラトが笑顔で言うと、ミスティはたちまち頬を膨らませて怒り始めた。

「べ、別に食いしん坊なわけではないんですよ！？ただこの料理がすごく美味しくて……！」

「はいはいわかったよ」

「むう……なんか釈然としないです」

「ほらそれよりもさ、部屋に案内してくれるんだろ？頼むよ」

「わかってますよー」

ミスティが先導して、宿舎に入っていた。

「中也綺麗だな」

宿舎の中は外見からもわかるようにホテルみたいなものだった。入ってすぐはロビーになっていて椅子やテーブルも多くあって結構の数の生徒が談笑している。

「おやミステイ。その子は新しい子かい？」

「あ、キールさん！」

後ろを振り返ってみると、四つの椅子に囲まれたテーブルがあり、その内の一つの椅子に腰かけている女性の姿があった。

白衣に身を包み、緑色の長い髪の毛を後ろで束ねている。

「紹介しますキールさん。この人は“トルシア”からやって来た藤堂アラト君です！」

と、ミステイが笑顔で言う。

「へえ、君が噂の一人か。私はキール・クロイ。この学園の医療を担当している講師だ」

そう言われてアラトは慌ててお辞儀をする。

「どうも。藤堂アラトです」

キールはそんなアラトを見て軽く吹き出した。

「プツ、ハハ！そんなに固くならないでよ！こっちがやりにくいんだから」

「は、はい。すみません」

「キールさんは医者で、先生で、ここの宿舎長なんですよ？」

「ま、大それたものでもないけどそんな感じだね。これからよろしく頼むよ」

「こちらこそよろしくお願いします」

その後はキールと別れ、アラトはミステイに連れられて建物の階段を上っていった。

上った先で災難に会うとも知らずに。

「第三話」ストラゲル

階段を上りきると、そこは円形の広場になっていた。

左右には通路が続いていて、どうやらそっちの方が部屋になっているようだ。

学生寮、ホテルのどちらにもない場所だった。

「ここは何の場所なんだ？」

一度グルリと見回してアラトが尋ねる。

「ここは闘技場になってます」

闘技場。その名の通り闘い、技を磨く場所。

そんな所が普通宿舍のなかに配備されているだろうか？

おちおち寝られもしないのではと知らない心配は胸にしまつて、アラトは再び尋ねる。

「ここで戦ったりするのか？」

訝しげなアラトの問いにミスティは苦笑いをする。

「戦うといっても、この学園では普通なことなんです。現にほら見てください」

ミスティがそう言つて、広場の反対側を指差した。

そっちに目を向けると、二人の男子生徒が距離をとって身構えていた。

これからお遊びを始める場面とはさすがに考えにくい。となるとやはり戦うのか。

「ちようどいいですね。私たちも行きましょうよ！」

「え？行くつてどこへ？」

「あの子達のところですよ！混ぜてもらいましょう！」

「ちよっ！まてつて！」

そうして結局アラトは引つ張られて男子生徒の元にやって来てしまった。

これから起こりうることを考えると内心汗まみれ。

「なんだぁお前ら？」

「俺たちに何か用か？」

明らかに敵意をむき出しに言う男子二人。

しかし、ミスティは少しも怯まずに笑顔で口を開いた。

「ストラグル、混ぜてもらえませんか？」

ストラグル？とアラトは頭に疑問を浮かべるが、話はどんどん先へ進んでいく。

「なんだ、混ぜてほしいのか」

と、長身の男。

「俺も別にいいぜえ。女子とやるのは気が引けるけどな」

にやけながら、今度は丈は小さいががたいがガツチリしている男が言った。

「ありがとうございます！さ、アラト君頑張りましょうね！」

ミスティはそう言って、アラトから離れていつてしまう。

他の二人もさも当然のように離れていく。

アラトは慌ててミスティに歩みよった。

「ま、待ってくれよ！まさか今からアイツらと戦うとか言わないよな！？」

ミスティは一瞬キョトンとして、首をかしげた。

すると、何かに気づいたのかばつが悪そうな表情を見せる。「も

しかして……ノアからなにも聞かされてないんですか？」

嫌な予感しかない、といった表情でミスティが尋ねる。完全に思ってもみなかったようだ。

それにアラトは頷く。

「もしかしなくてもそういうことだ」

「……どうでしょう？」

「いや、俺に聞かれても」

戦えないのに宣戦布告してしまった。なんというあり得ない状況なんだろう、とアラトは頭を抱えた。

端から見てもただの馬鹿馬鹿しいコントのようだ。

「おーい！何やってんだ！？早く始めるぞ！」

相手の一人が痺れを切らして叫ぶ。

そして、懷からなにかを取り出した。

「あれは、カードか？」「いけない！アラト君！気を付けてください！来ますよ！」

ミステイがそう言ったのと同時に驚くべきことが起きた。

「武器になった！？」

相手の手にしていたカードが輝き、槍になったのだ。

続いてもう一人もカードを出すと、武器へと変化させた。拳に付けるナツクルガードだ。

「なあにゴチャゴチャ言ってるんだあ？さっさと武器出せよ」

「まあ、先制攻撃はもうがな！」

一人の言葉を合図に二人がアラトとミステイに向かって走り出した。

「仕方ありませんね。」

アラト君、なんとか逃げ延びてください」

「逃げ延びろってどこに！？」

無責任すぎる言葉に思わずツツコミたくなるが（むしろしたが）、ここは押さえて状況確認。

逃げるとしたら後ろの通路だが、見てみるとこちらをみている生徒が出ていた。

彼らによつて逃げ道は断たれ、もはや逃げ場はない。

そうしてる内に男子生徒の一人、ナツクルガードをしてる方がアラトに向かって突っ込んできていた。

「武器を出さねえってことは魔法に自信があると見た。つまりは容赦しねえ！」

冷静にアラトのことを分析しているようだが残念ながら的はずれ。勝ち目がないようにも思えたが何もしないでただやられるのは割に合わない。

「……あーもう！やってやるよ！自信ないけど！」

ヤケクソになって、アラトは構えた。

相手は武器を持っているにしても、幸いなことにリーチは自分と
変わらないため反撃できそうだった。

それはなぜか……。

「くらいな！」

相手が拳を突き出し、パンチを繰り出す。
アラトはその攻撃を一步下がって避けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1189z/>

タリスマン

2011年12月5日22時53分発行